

《書 評》

Histoire de l'écriture : de l'idéogramme au multimedia,
sous la direction d'Anne-Marie CHRISTIN, Flammarion, 2001.

寺 田 寅 彦

2001年10月に出版された本書『文字の歴史』の初版は、数カ月という短い期間であつという間に売りきれとなり増版がなされた。英語とアラビア語での出版も決まり、現在翻訳作業進行中という代物である。縦24cmに横28cmという大型版で、総ページ数は432ページ、上質紙に400ものイラストがカラーで入ったこの豪華本は、値段も高価でその内容からすれば決して一般向けではないにもかかわらず、クリスマスにはプレゼント向けとしてパリの書店で平積みされるほどの人気であった。子供の小さな手にはあまるほど重たい本書のいったい何が、人々の心をつかんだのであろうか。

フランス語は言うまでもなくアルファベットを文字として用いているが、アラビア文字や漢字のような「書道」はない。シャンポリオンのエジプト古代文字の解説という偉業の他に、文字とフランス人の特別な結びつきを見い出すことは難しい。このような背景を持つフランスの近代的な「文字の歴史」は、1892年にアシェット社から出版されたフィリップ・ベルジェの『古代における文字の歴史』(Philippe BERGER, *Histoire de l'écriture dans l'antiquité*, Hachette, 1891)から始まる。当時の文部省(Ministère de l'Instruction publique)の援助を受けて出版された本書は、約400ページの本格的な専門書であり、ジェイムス・フェヴリエが1948年に『文字の歴史』(James FEVRIER, *Histoire de l'écriture*, Payot, 1ère édition en 1948, 2nde édition en 1959)を出版するまでは、この分野での重要な参考文献であった。

このベルジェの『古代における文字の歴史』は三部構成である。第一部が「アルファベット以前の文字」で、具体的には絵文字、象形文字といったアルファベット以外の文字の一覧であり、楔形文字、キプロス、中国、エジプト、アステカ、ヒッタイトの文字が紹介されている。第二部は「アルファベットの歴史ーフェニキアアルファベットとその派生アルファベット」で、そのタイトルの通り「ヨーロッパのさまざまなアルファベット」、「フェネキアのアルファベット」、ヘブライ、アルメニア、アラビア語と、各種アルファベットが網羅されている。第三部は「旧世界辺境のアルファベット」であり、ベルベル語、イベリア語の文字、オガム文字、ルーン文字等が扱われている。

こうして見てみると、ベルジェの本が極めて百科事典的であると同時にアルファベット中心であることが理解される。実際に「結論」で述べられているベルジェの文字の歴史観は、「人類が用いる文字がアルファベットにいたるまで」という「進歩論」でもある。

我々は旧世界の文字の長いリストを見尽くし、その発展を追ってきた。それは、言葉を固定させ、その考えの表現に消えない形を与える人間の最初の試みから、今日なお我々が用いているアルファベットの形成までのものである。我々が見たように、全ての〔文字の〕方式は、様々に異なる場所で生まれながらも、いずれも一つの同じ目的に収斂するのである。その目的とは、文字を用いて言葉のいくつもの音を表すということである。この方法が見い出され、アルファベットが表意文字の衣から解放された日に、人類は決定的な文字を手にしたのだ〔……〕。

Nous avons épuisé la longue liste des écritures de l'Ancien Monde, et nous en avons suivi les développements, depuis les premiers essais de l'homme pour fixer la parole et donner à l'expression de sa pensée une forme durable, jusqu'à la constitution des alphabets dont nous nous servons encore aujourd'hui. Nous avons vu tous les systèmes, nés sur les points les plus divers, converger vers le même but : l'expression, au moyen de l'écriture, des sons du langage. Le jour où cette formule a été trouvée et où l'alphabet s'est dégagé de son enveloppe idéographique, l'humanité a eu son écriture définitive [...].

この部分は「結論」の冒頭部（p.369）であるが、言葉の最終的な目的は表音でありアルファベットがその目的にふさわしい文字として進化した末の決定版であるという。このベルジェの進化的、アルファベット至上主義的な文字観は、彼個人に独自のものというより当時のフランスの文字観を代表したものであったといえよう。「最初に言葉ありき」の文化に生きるベルジェにとって、言葉の音を中心に据えていない古代文明の数々に出現する表意文字は、「文字が生まれるきっかけになった必要」に应えていないものなのである。

実際、言葉の音というのはどこでもだいたい同じものであるから、少々の変更はあっても、同じ文字が全ての言語を書くことに適していたのである。

これがアルファベットの勝利の理由である。なるほどアルファベットはエジプト文字に比べてずっと完璧さに欠けていた。しかしアルファベットは文字が生まれるきっかけとなった必要にもっとよく応えていたのだ。なぜなら、アルファベットはより簡単であり、もとはある言語のために作られたものであっても、他の言語にも応用可能であったからである。かくして、ことの成りゆきから、アルファベットは全文明世界の文字になるべくしてなったのである。

〔……〕

アルファベットは少しずつ西洋の全ての民に広まっていった。そして、東洋では数千年にわたって認められ非常に発達した文学を持っていた楔形文字やエジプトの象形文字の地位を奪ったのである。中国だけが、アルファベットにその門戸を閉じたのであるが、意図的に我々の文明外に身を置くことでしかアルファベットを拒否することができなかった。

En effet, les sons de la parole étant, à peu de chose près, les mêmes partout, les mêmes lettres

pouvaient, avec quelques légères modifications, se prêter à écrire toutes les langues.

Telle est la cause du triomphe de l'alphabet. Sans doute, il était beaucoup moins parfait que l'écriture égyptienne, mais il répondait beaucoup mieux aux besoins d'où est née l'écriture, parce qu'il était plus simple et qu'il pouvait s'appliquer à d'autres langues que celle pour laquelle il avait été crée. Aussi devait-il devenir, par la force des choses, l'écriture de tout le monde civilisé.

[...]

L'alphabet s'est étendu de proche en proche à tous les peuples de l'Occident et, en Orient, il a supplanté l'écriture cunéiforme et les hiéroglyphes de l'Egypte, qui étaient reçus depuis des milliers d'années et qui avaient une littérature très développée. La Chine seule lui a fermé ses portes, mais elle n'a pu le faire qu'en se mettant volontairement en dehors de notre civilisation.

アルファベットが全文明世界の頂点に立つ文字であるとするベルジェは、アルファベットを使用しない中国の文明を「我々の文明の外」と位置付ける。ごく一部を除いて文明世界にはアルファベットしか認められないという認識であり、アルファベット以外の文字の持つ豊かさは否定されているといつてよい。

半世紀以上続いたベルジェの表音文字中心でアルファベット至上主義的な文字史観はフェヴリエの『文字の歴史』によって変化のきざしを見る。フェヴリエの本でも歴史上現れた文字の数々を通史的に見ていく体裁は変わらないし、文字は「述べられた言葉がその本質自体からはかないものである、これを釘付けにし、固定する現在我々が用いる方法である（«L'écriture est un procédé dont on se sert actuellement pour immobiliser, pour fixer le langage articulé, fugitif par son essence même.»）」とする点では変わりはない。しかし、文字と発話の関係の重視はあっても、ジェスチャーと文字の関連や、イメージと文字の関連、さらに文字の持つ魔術的要素などにも重点を置く極めて現代的なアプローチがフェヴリエの本にはある。

この変化は文字の歴史を取り上げる児童教育の副教材において顕著である。たとえば1947年に作られたアルフレッド・カルリエの児童自習教材『文字の歴史』（Alfred CARLIER, *Histoire de l'écriture*, Cannes, l'imprimerie à l'Ecole, 1947）は、「あなたがたが自分自身を表現するために、あなたがたの周りの人にあなたがたが感じたことやしたいことを分かってもらうために、あなたがたは話します。（«Pour vous exprimer, pour faire comprendre à ceux qui vous entourent ce que vous sentez et ce que vous voulez, vous parlez.»）」と話すこと文字との関係の強調から始まり、アルファベットとヨーロッパ中世マニュスクリを紹介するだけのものとなっているが、1978年に出版されたジェラルド・シュクルンの中学生向け副教材『文字の歴史』（Gérard SCHOUKROUN, *L'Histoire de l'écriture*, Saint-Germain-en-Laye, Editions M. D. I., 1978）では、文字と発せられる言葉との関係の深さを認めながらも、「しかしながら文字は単なる道具ではない。言葉を音のないものにすることで、ただ言葉を保つのではなく、さらにそれまでは可能性の状態でしかなかった思考を具現するのである。（«L'écriture est néanmoins plus qu'un instrument. En rendant la parole muette, elle ne la garde pas seulement, elle réalise en outre la pensée qui, jusque-là, reste à l'état de

possibilité.）」と文字がグラフィックな表現で言葉以上のものを表現していることを強調するものとなっている。当然、中国やエジプトの象形文字に重点が置かれているばかりか、文字の支持体 (support) にも細心の注意がはられている。

このような流れの中で本書はさらにイメージと文字との関係を強調したものとなっている。まず本書の構成を見てみよう。第一部「起源と再発見」(«Origines et réinventions») では楔形文字やエジプト、中国の文字はもちろんのこと、日本の平仮名、片仮名、ナファア語の文字、イースター島のロンゴ＝ロンゴ、果ては古代インカの文字縄 (キープ) にいたるまでのアルファベット以外の「文字」が扱われている。

だが、この第一部は単なる様々な文字の紹介なのではない。たとえば日本文化において文字が絵の中で占める位置 (Jacqueline PIGEOT, «L'écriture dans l'image»),あるいは逆に絵文字、文字遊びのように文字で絵を構成する例 (Marianne Simon, «Des images en écriture») など、イメージと文字の緊密な関係を多くのカラーイラストを用いて披露しているのだ。イラストがカラーであることは、単にそれが美しいからというだけではない。作品の支持体の素材はこのカラー写真のおかげで、その質感をよりよく読者に伝えることに成功している。これまでの文字の歴史の出版物は文字の一覧表、あるいは筆記用具のイラストを白黒で載せるにとどまっていたが、これに比べると格段の違いである。木、紙、石、銅板、亀の甲羅といったそれぞれの素材と文字の関係がリアルに迫ってくるのもカラーならではである。

第二部「アルファベットとその派生の文字」(«Alphabets et écritures dérivées») では地中海周辺に発達したアルファベットの紹介が中心になっているものの、ここでもカラーイラストが大きな役割を果たしている。陶器、石盤、彫像、建築物、壁、つば、指輪ガラス、墓、硬貨、モザイクとありとあらゆる文字と支持体との関係が探られている。それだけではない、これらの文字が装飾芸術の中でイメージと密着していることが、これらのイラストからじかに伝わってくる。

第三部「西洋における文字の中のイメージ」(«L'Image dans l'écriture en Occident») は、この第二部の具体例を挙げての発展である。中世マニュスクリやポスターといったイメージとテキストの関係を直接探るものから、書簡、サイン、文字の書体、文字教育という周回のテーマ、印刷技術、活字、フローベールやレーモン・クノーの手稿、画家本、果ては活字のデジタル化やマルチメディアにいたるまでの西洋における文字とイメージの関係が展開されている。

本書はこのように幅広い分野を扱っているため、各項目ごとにそれぞれ専門の執筆者が割り当てられている。また、この執筆者にパリ7大学の研究チームで国立科学研究所 (CNRS) 付きであるエクリチュール研究センター (Centre d'étude de l'écriture) のメンバーが多いのも強みであろう。1970年より活動を始めたこのエクリチュール研究センターは、イメージとテキストの関係を論じた研究活動で定評がある。今までの研究の成果が本書に生かされているといってもよい。

こうしてみても本書が単なる歴史通観の本ではないことが容易に分かる。そして、本書の特色の理解を助けるべく、本書冒頭には監修者アンヌ＝マリー・クリスタンの「イメージから文字へ」(«De l'image à l'écriture») と題された一文が掲げられている。タイトルからもイメージと

の関係において文字が考察されていることが分かるこのクリスタンの文は、シャンポリオンのエジプト文字解読のエピソードを通して、文字がイメージならびにその支持体と緊密かつ複雑に結びついていて、単なる発音表記以上の価値を付与されていることについて述べている。

古代世界における文字のあり方は、この好例である。ある一つの言語はその言語を話すあるグループ内のコミュニケーションのみに役立ち、他のグループとのコミュニケーションには役立たない。その一方で、イメージは異なるグループ間のコミュニケーションを可能にする。その最たるものは神と人とのコミュニケーションであり、中国の亀の甲羅を用いた卜占はその一例である。「あの世」の神は「この世」の人と異なる言葉を話すばかりか、それは目に見えない世界である。だが亀の甲羅という「支持体」に出現するイメージによって、その目に見えない世界と目に見える世界との交信が生まれるのである。原始文字である甲骨文字が亀の甲羅に刻まれたのには意味があるのであって、亀の甲羅が世界の鏡とみなされていて聖なる「支持体」であったからである。

母音と子音の組み合わせであるアルファベットは、その抽象性ゆえに「純粹」であると考えられる。だが、目に見える空間と物質に結びついているイメージから文字が「解き放たれて」しまったことによって、文字は「目に見えないものを見えるものにする」イメージの持つ豊かな力を失ってしまった。本書は表音文字中心、アルファベット至上主義的文字史観を改めようとする流れに位置し、古代文明が伝えるイメージの力を兼ね備えた文字の在り方をアルファベットの中に見い出し、アルファベット以外の視野からアルファベット文化を見直そうとする。文字どおりヴィジュアルな具体例をもって、イメージの持つ意味が音の表記以上のものであること、そして「支持体」が意味を持つものであることを教えてくれるのである。

古代の人は、天の星に神のメッセージを読み、イメージに交信と伝達の可能性を見い出した。本書の最初のカラーイラストが夜空に瞬く星々であるのは象徴的である。クリスマスにこの『文字の歴史』を手にとった多くの人々は、天空にきらめく星のような文字の持つヴィジュアルな力に魅了されたのであろう。